

くの流れを集め、多くの湖を抱き、海のような水量豊かな川、それは悠久の昔から、醜悪な人間社会の興亡と自然の暴力と恩恵を秘めて流れるボルガ川で、我々に命を大切にせよ、達者で日本の土を踏めよと激励してくれ、力強さを与えてくれた感慨は、五十年余後の今も忘れることが出来ないものであった。

昭和二十二年の冬がまたやって来た、最近では日本帰国の噂も出ない。燃料の少ない収容所のペチカでは、零下四十度の夜の寒さに栄養不良も加わり身体の中までも凍るようだった。この冬もまたここで越す運命かと思っていた十一月中旬、突如として列車に乗車準備の命令が出た。私物などほとんどない身軽さである、乗車完了。ダモイか転属か、列車は東へ進むに従い、日本兵のいっぱい乗った有蓋貨車が次々と連結された。帰国万歳と心の中で叫んだがまだ判らない。日本の船に乗るまではと心を引き締めていた。来た時よりずっと早くシベリア鉄道を東へ東へ走り、意外に早くナホトカに到着した。各地から真っ黒に日焼け雪焼けた日本の兵隊が結集していた。どの顔も喜びに溢

れている。

数日して引揚船が日章旗を翻して入港して来たのを見たとき、期せずして「万歳」の声が湧き上がった。もう奥地へやられることはなからう、日本だ、と涙で旗が見えなかった。

昭和二十二年十二月五日、函館に上陸、ソ連の土となるかもしれないと覚悟していたが、今まさに日本の土を踏んだ。身体検査、防疫、調査など数日かかって郷里の京都府船井郡八木町の生家に帰り着いた喜びは終生忘れることはあるまいと思ひ、同時に、未だソ連の大地に眠る多くの戦友の集骨と冥福を祈ります。

鉾山で励まし合う友よ

共に帰国を

島根県 吉野 一郎

島根県八束郡大庭村にて理容業者の長男として大正十二年一月十二日出生し、松江中学校を昭和十五年三

月卒業、当時の国策に沿い進学は諦め、海外雄飛の念に燃え、直ちに満州国に渡り、満州電信電話株式会社に奉職、社員としてチチハルの電報電話局に勤務する。

昭和十八年兵役検査を同地で受け、翌年二月、満州国孫呉の部隊に防空兵として入隊する。その後、同部隊から転属になり、国境守備隊の第八四部隊(？)野砲兵の初年兵となり、そこで主計下士官候補生になり、教育を受けるためチチハルの教育隊に入る。

昭和二十年八月、同教育隊は、チチハルの関東軍第八一八部隊(？)に編入され、関東軍の倉庫を準備していた。

終戦の詔勅は部隊の中で聞いたが、その頃にソ連軍の飛行機が上空を飛んでいて非常に淋しく、いやな感じを受けた記憶が残っている。

八月十九日頃にソ連軍が侵入して来たので、隊全員が並び、銃と剣を前に出し、武装解除を受けた。我々の部隊は少数であったためか、終戦になってからチチハル近郊にある部隊(衛生兵)に編入された。

八月下旬の暑い暑い日であったが、部隊が行軍に動き出し、喉が乾くので道路端の大根を盗り、かじりながら歩き、鉄道沿線に向かって二日間ほど歩いた。

黒河近くの場所だったと思うが、シベリア鉄道經由で東京ダモイだと聞いて、疲れ切った身体を貨車の中へ横たえた。

何日かたつてソ連の沿線にて、再び大きな上下二段の有蓋列車に詰め込まれシベリア鉄道を南下していくので、全員が少し元氣を取り戻し、ナホトカ經由でダモイ東京、間違いなしと喜んだ。ところが、二、三日たつてから貨車の一カ所しかない窓から外を見ると、日本軍の戦友を乗せた貨車が、我々と反対方向に走っているのを見て誰も顔色が変わってきて、静かな貨車の荷物のような状態となる。また二日ぐらいたつて、駅でもないのに全員が下車させられて不思議に思っていたが、そこから二日ほど歩いて山の中へ入り、古びた建物二棟に着いたが、周囲が柵で囲まれた場所であった。

その収容所は以前に使用していた建物で、屋根はあ

るが中はすごく荒れており、とても寝起きする状況ではなく、まずその収容所の修理作業を全部手作業で行う。建物の中を三段階に仕切り、丸太棒を横にしただけの寝床を作り、どの階も膝を組まないと天井に届くので座っている者はなく、皆が身体を横にしていただけであった。

その収容所には二百人ぐらいおり、作業は伐採、道路、鉱山の三班に分かれていた。小生は鉱山班に属し、朝まだ薄暗い時に起こされ、まず点呼だが、ソ連の将校だと思うが、人数確認に非常に時間がかかり、極寒時には大変であった。そして、毎日トラックに乗せられ鉱山の所へ通った。

鉱山は廃坑してあったのを、我々が来たので採算を度外視して作業に取りかかるも、各作業場には電気設備等もなく総て人力で行う。我々の作業は、坑道の中へ深く入り、四人一組で前夜ハッパで崩した岩石をターチカ（一輪車、ネコ車）に乗せて百メートルくらいこの所へ運び出し穴へ落とす作業であったが、その時一番苦勞したのは、電気設備の照明がなく、空缶に重

油を入れて芯に火をともした物が一個で、ほとんど暗がりて勘に頼って作業を行ったことである。毎日坑道の中で重油の煤煙等を吸っての作業であった。そのため、帰国後も三年間ほどは体内より黒い排出物が出た。それでも、その日のノルマを果たさないと翌日の食事の内容に差がつくので、誰もがただ黙々と生懸命に働いた。

初年度の冬を迎えて日夜の生活は筆舌に尽くし難いものであったが、その中でも苦しかったことは、何といても毎日トラックで運ばれる時、顔面が凍りつき、呼吸ができにくかったことだ。

収容所生活にもやや馴れたけれども、毎日の食生活の栄養不足がいよいよ誰にも出て来て来て鳥目になり、その上、夏になると下痢で腹痛を起こし、夜間収容所の中程にある丸太棒の便所に通うのに隣の戦友を起こして連れて行ってもらうけれども、その戦友も鳥目になり、一人で這って便所へ通ったこともあった。

夏季になったら、南京虫、シラミ等で悩まされ、夜眠れないので屋根裏で過ごしたこともあった。

食事内容も肉類はなく、野菜の漬けたものがあれば良い方で、一番苦しかったのは、主食に大豆をゆでただけの時期があったことだ。これは冬場であったので、大豆をつぶして団子にし、ベーチカで焼き、焦がして食べたが、その頃より誰もが健康を害し、体力が衰え、痩せてきていた。でも、飢えと寒さと重労働の労苦に耐えて何とか母国へ帰らなければという一念で全員が励まし合ううち、何となく歌の好きな若い者四、五人で休日には歌や踊り等で励まし、小生も下手な安来節、関の五本松節の民謡を、スコップを三味線に、ターチカを太鼓にして歌って慰め合ってダメイを待った。

昭和二十二年春の訪れとともに、收容所の中がざわめき出し、日本ヘダモイの話が伝わり、久し振りに人間に戻ってきたような感じがした。

道路作業をしながらも、どうもナホトカに向かって帰るのではないかと思うが、まだ重労働の作業をしなければならなかった。でも作業をしても、今までよりも気分的に楽であったが、食事内容は相変わらず

悪く、常に空腹の状態は変わらなかった。

作業部隊は混成チームであったが、道路の作業中に、ヘビヤカエルが冬眠しているので捕獲してスコップの上で焼き、食べた味は今でも忘れることなく残っている。コルホーズ（農場）でニラ畑の草取り作業に行き、帰りに皆がポケットにニラを持ち帰り、夜に食べた味はつきりと頭に残っている。

まただまされたかと心配したが、それでも今度は海の見える大きな街にたどり着いた。誰もが今までと違って、人が変わったようによく種々と話をするようになった。

大きな船も港へ着き、もはや日本の地を踏んだようになっているところへ集合がかり、もう少し作業があるから十人ほど残るようにとのこと。この時には誰もが俄かに病人のような容姿に変貌したが、元氣そうな若い者が結局引っぱり出され、そのまま最後の別れとなった。

翌日に先の約十人以外全員が、喜び勇んで日の丸の旗を立てた大きな船に乗船した。船の中のことはいま

りの嬉しさに何も覚えてないが、翌日、船より日本の山並みが見えた時は、誰しもが涙を流しながら声の続く限り「万歳」を叫んだことは、いまだに覚えてい

る。
遂に舞鶴港に到着し我れ先にと下船する時、あまりの嬉しさに慌てて誰か一人、棧橋から海へ落ちたことがなぜか頭に残っている。

昭和二十二年九月二十二日、毎夜夢にも見た故郷の我が家に帰った。ぐっすりと眠れる中で、どうしても抑留中のいろいろのことが思い出される。我々の内地帰還がソ連抑留者の中では比較的に早かったことを喜ぶとともに、後に残った同胞のことを考えると、「すまない」という気持ちになったが、それにもまして頭の中へ思い出されてくるのは、チチハル市で武装解除され、ソ連抑留中に飢えと寒さと重労働に耐えられず、郷里の土も踏むことなく、あの極寒に収容所近くの小山に埋葬した十数人の戦友のことである。友の御冥福をお祈りいたします。

幸いに小生は帰国後、村役場の書記に採用され、そ

の後公務員として定年退職まで勤めさせていただいた。その間、人生として山坂はもちろんあった訳だが、中でも平成元年十月入院を余儀なくされ、腸と胃の一部を同時に切除する大手術をして、生死の境を数回さまよった。このような状態の時に、あのソ連における抑留の苦しかったことを思い出しながら治療を受けたが、人間としての底力が出されたと思っている。

六十歳を過ぎた頃より腰痛に悩まされ治療を続けているが、これもソ連の鉾山の坑道の中で中腰にてターチカ作業をしたことが原因ではないかとの診断を受けている。

最後に、七十六歳になった現在、過去の人生を思い出し最近の世情を考える時に、我々年代の者が種々と犠牲になり今の日本国があることを考えると、日本国家、日の丸の旗、君が代の問題等については一考しなければならぬのではないかと思っている昨今である。